



ピノコパパのエッセイ



日本の神々

伊勢神宮

pinokopapa

日本の神々 — 1 —

さて、日本の神々です。

古風な迷信

素朴な神話

不思議な呪術

これら地表に現れい出た

果実のはるか下で

民族の魂の命根は

生々と脈打っている

この国の人々の美の感覚も

芸術の才も

剛勇の炎も

忠義の赤誠も

信仰の至情も

すべては子の魂の中に

父祖より伝わり

無意識の本能にまで

育まれたものだから

神々の国の首都の

私の私の前には

広々として美しい湖が

柔らかい光でにぶくかがやいて

眠っている

この大気そのものの中に

何かが在る

湖面に降りそそぐ

明るく澄んだ光の中に

何か神々しいものが感じられる

これが神道の感覚というものだろうか

長々と引用しました。小泉八雲氏の「神々の国の首都」の一節です。この中の広々として美しい湖とは宍道湖のことです。この一節はまるで詩を書くような思いで書かれております。まさに松江の朝のしじまの中に響く柏手の音のようにおもえます。徹夜のバイト返り、松江大橋を自転車で越えていた時、早くも漁をしているシジミ採り船がみえました。それが、朝日が昇り始めると作業の手を止め、貝取ジョレンの柄を抱えて、朝日に向かい柏手をうつのです。手拭いで頬かむりをした老漁師でありました。私の息が白い朝でした。

以来、頭の隅にその光景が残っており、神社と見れば欠かさず参ることにしております。すると、神社は寺ほど大掛かりでなくて、また寺以上に散在していると気付きました。こんな田舎でも、様々な神さまがおいでになります。氏神さまから木熊野神社、荒神神社、権五郎神社、大麻神社に加えて名前のわからぬ神社もあります。そして、そのほとんどが手入れ

の行き届かず、木々の落葉で埋まっています。そんな時、熊手と竹ぼうきがあれば、人目を忍んで掃除をします。すると年末には、氏子でしょうか、何人かの人が出て掃除しておりました。しかし今年は、障害者作業所の車が止まり、それと分かる人たちが何人かに分かれて、てんでに道具をもち、まとまらない様子で掃除い除をしていました。もう集落に人がいないのです。ですから、年末に神社の掃除もできなくなってきています。熊手も箒もなくなりました。あれば、そっと掃除ぐらいしておきますのに。

日本の神々 - 2 -

旅行好きの妻が娘といったのが、伊勢神宮でありました。ところが、式年遷宮の前の年で、その話題がよくテレビに出ており、そのためか、人だらけで、おかげ横丁は思ったように歩けないほどだったとか。その旅行がバスツアーであったため、お参りのための時間が決められており、これはとてもまいてこれないと、おかげ横丁をうろうろして終わったそうです。その年の娘婿殿の資格試験は不調でした。あの時参ってさえいればと、娘は悔みます。

我、神仏を頼まず、じゃ！受かる人は、試験の前から受かってる。駄目はもともとだめなんだ。

きつい言い方だったでしょうか。でもギリギリのところでは合否の線状にある人は、運が良く受かるってこともあるじゃない？と言い返してきます。運を頼むな。受かれと、こっちも言い返します。神さまはどうするんでしょう。

日本の神々 - 3 -

はっきり言って、私は妻ほど旅行好きではないのですが、そんなに言うならいってみようと言ったばかりに、伊勢へ行く羽目になってしまいました。それで、妻が同じ行くなら、あそこに泊まりたいと問い合わせたのが神宮会館でありました。日程はその神宮会館の空いてる日と決めていたので、この日ならばと会館の言う日に決まりました。しかし、確かに空いてはいたけど、食事は出来ないことになってしまいました。団体さんの宿泊が、私たちの夕食朝食を奪ったのです。それも、会館に着いてからそのことが解り、当惑することしきりでした。空腹は人を怒りっぽくします。知らぬ土地で、それも肌寒いなかを、私たちは町へ出ました。ところがもう時間も遅く、店のあちこちは閉めてしまっています。たまたま開いていたおおきな食堂兼土産売り場にほっとしながら飛び込むと、もう食堂は閉めてしま

いましたの返事でした。そしてたまたま出くわしたのが御木本真珠島店でありました。なんの予備知識もなく、行さえすれば何とかかなると思って出かけ、困り果てた末のお店でした。下は華麗な真珠が並び、二階で軽食を取ることが出来る、ちょっとレトロな洋館づくりの、居心地のいいお店でした。何を頼んだかはもう忘れていますが、食後のコーヒーはおいしかった。それでいられは納まり、宿への帰り道で、なにやら伊勢名物のB級グルメを買い込んで帰ったのでした。

少し長々と旅の話をし過ぎました。とにかく、伊勢に着いたその日はさんざんだったのですが、神宮会館に泊まってよかったのは、朝6時に会館を出発して、神宮をガイドしてくれたことでした。前の夜、食事から帰った時、そのことは知ったのでした。ちょっと臍が曲がっていたので行かないとつっぱねてしまったのでした。けれど、妻の誘いに乗って、ついてゆくことにしたのです。見明、少し霧がかかり、白い街でありました。

5時半に、館内放送がありました。

6時より神宮をご案内いたします、ご参加のお客様は6時まで一階ロビーにお集まりください。

私たちはもう起床して、昨夜買っておいた饅頭と缶コーヒーで空腹をしのぎ、放送を待つて着替えを済ませ、6時前にはロビーへ行っておりました。それでも未だ遅い方で、私たちとほぼ年恰好の似通った人たちが既に集まっておりました。

日本の神々 - 4 -

人数は10名を超えていたでしょうか。これから少し歩いていただきますと言われたので、田舎者は相当な距離を歩くものと覚悟したのでした。町の歩道を少し歩くと、すぐに大きな鳥居の前につきました。後をついてゆきながらみると、ガイドさんは黒のスーツにスカートを穿き、手に白の手袋をしております。髪はパーマなどあたっておらず、清楚で地味な薄化粧の、好感の持てる女性でした。

朝霧の白さの中に、一の鳥居は立っておりました。一の鳥居は、京の神社のように何か色が塗られているわけでもなく、白木のままでした。ガイドさんがその木に触って見てくださいます。柱は見事にすべすべで、手に触るものではありませんでした。この木は、すべて職人さんの手で、昔の道具を用いて削りあげられたものだ、とガイドさんは説明しました。鳥居の向こうの宇治橋も、その向こうの全部の社殿もそうだといいました。たぶんその道具は、普通の鉋ではなくて槍鉋と言うものだろうと察しはつきました。宇治橋も遷宮に合わせて架け替えられるそうです。しかし、そこに使われている擬宝珠は再利用されるとか。鳥

居も社殿も、そこに使われた木々は地方の神社でもう一度使われ、無駄に捨てられることはないのだそうです。そう説明して、ガイドさんは鳥居の端に立ち、目礼して境内へ向かいました。その姿勢のすがすがしさを見られただけで、この案内に加わった価値がありました。

日本の神々 - 5 -

もうその頃は霧も晴れて、まだ時間も早いというのに参拝客も見られるようになっておりました。宇治橋を渡ると砂利道が続きます。ここの砂利はふつうにみられる石の砂利です。こんな風にいうのは、社殿に参る参道のことがあるからです。社殿の前に立つ鳥居から向こうは、白砂利でした。こらは見たことがありませんでした。これを踏むと普通の砂利より大きな踏み音がします。ガイドさんの説明では、どなたかの好意で寄進されたものだとか。また、この白砂利にも意味があるのだとのことでしたが、その理由はちょっと失念いたしました。

内宮には沢山の社殿があり、多くの神さまが祀られております。しかし、残念ながらあまり聞

き覚えのないお名前なので、ガイドさんから聞いたときは頷いておりましたが、覚えていません。ただしんとしたしめやかさを、その佇まいに感じたのは思い込みでしょうか。神苑を歩き、五十鈴川の手洗い場へ来ると、そこで手を浸して清めます。その川の水は冷たいというのではなく、清々と流れておりました。ただの川の水なのにと、思ったりもしましたが、その冷たさが手に染みます。

内宮の社殿には賽銭箱など一切ありません。また、神様の前に立って願い事をしてはいけないと言われました。賽銭箱がないのは、神宮の祭儀を主宰するのは天皇陛下であって、天皇陛下以外のお供えは私幣禁断といって許されていないからです。そのため今も内宮・外宮には賽銭箱がなく、その代り白い布で覆われた場所が用意されています。願い事をしてはいけないのは、神さまに今日も、または今日まで、無事に生きてこられたことを感謝申し上げるのが神宮での参拝のしかたであって、個人的な願い事をするために参拝するものではないからです、とガイドさんに言われました。その代り、内宮でも何をお願いしてもいい神さまがいらっしゃる、それが荒祭宮です。ここでは個人的なお願いを、幾らしてもいいのです。しかし、ここにも賽銭箱はありません。

さらに、神宮にはないものがあります。注連縄、狛犬、鈴と鈴緒、おみくじ、御朱印帳といったものです。普通の(?)神社では、これらは一式セットになって組み合わされ、境内におかれておりますが、神宮にはありません。

賽銭箱がないことは、おはなししました。注連縄、狛犬、おみくじがないというお話をしまし

よう。注連縄の事です。注連縄は、神域と現世を隔てる結界の役目をしております。この注連縄、神宮内には一本もありませんが、伊勢市では一年中飾っておくのだそうです。これも奇妙。しかし、これと対照的なのが出雲大社です。出雲大社は注連縄で有名です。では何故神宮に注連縄はないのか。理由は解っておりません。大口をたたいて、肩透かしで申し訳ありません。神社をお参りすると言えば、鳥居をくぐり、狛犬の間を通過して参道を進み、拝殿でお参りするというのが普通でしょう。その狛犬も仁王さんと同じで、片方が口を開き、もう片方は口を噤んでいるといった風に作られていることが多いようです。その狛犬も狐であったり、猿であったりもしますが、神宮にはないのです。ではその狛犬、もとは宮中の清涼殿の前に魔除けとして置かれていたものだったのですが、神社に置かれるようになったのは、なんと、江戸時代からだそうです。つまり、神宮が出来たずうっと後に神社に置くようになったわけで、神宮が出来た時にはそもそも狛犬というものがなかった、というのが、そのわけです。

鈴はどうでしょう。これも鈴の音をもって参拝者の心を落ち着け、祓い清める意味があります。ところが、これはなんと戦後から始まったことのように、それゆえ、神宮には鈴がありません。動揺に出雲大社にも、拝殿に鈴はないそうです。ですから、拝殿では柏手を打って、二礼二拍手で参拝しましょう。

おみくじですが、おみくじはもともと、国の重要な問題を決定するために神様の意思を占うために使っていた神籤が起源であります。そのため、おみくじで、個人的な吉凶を占うことははばかれるという考えがあるからなのです。もともと、神宮にお参りすること自体が吉日であり、苦勞してお参りに来た老若男女みんなが公平にその吉をいただき、神宮に参ってこれまでの吉を神さまに感謝することが大事であるということから、おみくじがないともいわれています。

今日までかかって、長々と語ってまいりましたが、本当はこの一文でよかったのかもしれませんが。神宮の内宮に社殿を持たない神さまがいらっしゃいます。四至神という、いわば内宮の神域の

四方の境界を守護する神さまのことです。この神さまをお祀りしてある所は、社殿を建て

ずに神を祀る、古くからの神祀りの形を残したものだとおしえられました。昔の人は、そこに何

かしら厳かなもの、侵してはならないものかんじると、その場所を掃き清め、たとえば石を積

んで榊を奉り、供物を祭って敬拝してきたのでした。それが日本の神々であったのだとおもい

ます。

さて、ここは大変なパワースポットで、他の記事を見ると、そんなことをしてはならないとかいてありましたが、ガイドさんは、その磐座の上に手をかざすようにといました。何か、感じませんか。それが、感じるんです。風のようなもの、温かさ、いや涼しさ、かもしれませんが。そんなの、暗示にかかっているんだと言われればそれまで。圧倒的なパワーなんてもんじゃなくて、手のひらに染みってくる、そんなものを感じます。知らなければ見逃します。おやしろもありません。だから有難そうになどみえませんが、神宮最大のパワースポットといわれております。神宮においきになったら、是非足を止めてご参拝ください。外宮にもあります。

神宮のご神体の話とか三種の神器のことなど、語らねばならないことは多々ありますが、もはやこれまでといたします。__